

探偵師ヒミコ事件録
未来への存在証明

【登場人物】

トヨ（8）巫女見習い

（13）ヤマタイコクの次期女王

ヒミコ（25）ヤマタイコクの女王

イヨ（8）巫女見習い

（13）巫女見習い

アンネ（17）未来人

ヒミコ（28）クナコクの王

クコチヒコ（18）ヒミコの補佐

スサノオ（37）七神官の一人

（42）七神官の一人

シグリ（28）七神官の一人

アラタ（19）七神官の一人

ヒルメ（23）七神官の一人

ヒルコ（26）七神官の一人

シジマ（68）七神官の一人

ミナギ（74）七神官の一人

祭祀長（40）

ヤマタイコク軍隊長（44）

クナコク軍隊長（40）

村人A、B、C

巫女見習いたち

村人たち

ヤマタイコクの兵士たち

クナコクの兵士たち

アンネの仲間たち

○宮殿・広間

灯籠が並ぶ暗闇の中。鹿の頭蓋骨が火にかけられている。ヒミコ（25）、頭蓋骨に向かって念じるように手をかざしている。それをじっと見守る七神官たち。

頭蓋骨にひびが入る。

○北内郭・門の前

ヤマタイコクの住民たちが行きかう大通り。門の前に大勢の人が集まっている。

その光景をよそに列をなして肅々と行進する巫女見習いたち。

後ろのほうに並ぶトヨ（8）とイヨ（8）。

イヨ「ねえ、ホントにいいの？」

トヨ「大丈夫、ちょっと見て戻るだけだから。合図をしたら行くよ……

三、二、一」

トヨ、イヨの手を引っ張る。そのまま野次馬の中に飛び込んで上手く紛れる。

立ち並ぶ住民たちをかき分けて門の前へ抜け出す。

スサノオ（37）が台の上にあがる。

スサノオ「皆の者、静まれ！」

騒がしかった一帯が、すっと静まり返る。

スサノオ「先日よりこのクニをさわがせておったアワ、コメ、その他穀物が盗まれた件だが、つい先ほど我らがヒミコ様が予言された。すでに身柄は拘束し、今は査問にかけられている」

住民たち、大いに喜ぶ。

祭市場の中から、拘束した村人を兵士が引き連れて出てくる。

村人A「さすがヒミコ様だ」

村人B「すべてをお見通しというわけね。ああ、ヒミコ様のお姿、一度見てみたいわ」

○祭祀場・中

トヨ（13）含めた巫女見習いたちが手を合わせて祈りを捧げている。

祈る巫女見習いたちの足元から波紋が波打つ。

トヨからはひととき強い波紋が発生する。

波紋は祭祀場の外へ向かい、森に張り巡らされた結界まで届く。

祭祀長（40）、祈りの手を止める。

祭祀長「これで今日も私たちのヤマタイコクは守られるでしょう」

○祭祀場・前（朝）

貧しい村人たちが列を成している。

その先では巫女見習いたちが炊き出しを行っている。

見習いA「（汁物を注ぎながら）はい、どうぞ」

× × ×

次の村人Cが並んでくる。

見習いA「（肩を竦めて）ごめんなさい、さっきの方でなくなっちゃったんです。今、次の分を作っていますので少しお待ちを——」

言い終わる前に、村人Cが鍋を蹴り倒す。

地面に落ちて割れる土器。

怯える巫女見習いたち。

見習いA「神聖なる食物になんてことを……！」

村人「うるせえ！ さっさと飯をよこせてんだ！」

祭祀長が駆けつけてくる。

祭祀長「やめてください！」

村人「なんで俺がこんな惨めな思いしなきゃいけないんだよ！」

村人C、祭祀長に殴りかかる。だが、地面から延びてきた根っこに全身を絡みとられる。

村人「な、なんだこれは……!？」

トヨ「それ以上の暴力は許しません」

村人「ガキの癖になめやがって——」

村人C、懷から青銅のナイフを取り出して、まとわりつく根っこに切れ込みを入れる。

トヨ「そうはさせません」

トヨが手をかざすと、今度は突風が舞い上がり、村人Cを近くの湖に落とす。

村人C、湖から這い上がってきて、

村人「鬼道使いか……くそ！」

村人、悔しそうに去っていく。

その様子を林の影から観察しているヒミコの姿。

○祭祀場・倉庫

トヨとイヨ、食料や土器を片付けている。

イヨ「さつきはありがとう。トヨはすごいね」

トヨ「いいの、あんなの当然のこと。気にしないで」

イヨ「最近、ああいう人増えたよね」

トヨ「うん」

イヨ「やっぱり、クナコクとの戦争のせいなのかな。普段、農業をする男の人も戦いに行ってるから、お米もだんだん作られなくなってるみたいだし」

トヨ「うん。今日は明らかにお米が減ってたよね。今まで通りなら平等に配れたのに……でも、ヒミコ様ならきつとこのクニを勝利に導いてくれるはず」

× × ×

トヨが持ち場を離れ、イヨが一人で整理しているとき、巫女見習いの三人組が入ってくる。

三人組A「ねえ、これ片づけといてくんない？」

トヨ、イヨの方を振り向く。うなだれるイヨ。

三人組A「いい？ このクニには二種類の人間がいる。ひとつは鬼道の力を持つもの。もうひとつはあなたのような、力を持たざるもの」

三人組Aが手を合わせるとイヨの周りに火が立ち上がる。

三人組A「私たちは祈ることとこんな風に奇跡を起こせる。こんな芸当、あなたにはできないでしょう？ はっきり言って邪魔よ、鬼道も使えないのに」

トヨ「そんなことない、私だって役に……」

三人組A「そうかしら？ 私たちは結界の補強に貢献してる。でも、あなたは違うでしょう？」

詰め寄る見習いたち。怯えるイヨ。

駆けつけたトヨが、燃え上がる炎を手で払いのけてかき消す。

トヨ「安心して、これはただの幻術」

三人組A「ちっ、邪魔すんじゃないわよ」

トヨ「そっちこそ用もないのに、邪魔しないで。そっちがその気なら私も容赦はしないよ」

三人組、後ずさって、

三人組A「少し力があるからって調子に乗って。ふんっ」

三人組、去っていく。

○祭祀場（翌朝）

トヨや見習いたち、朝の礼拝を終え、出ようとする。

そこにヒミコが普通の巫女の姿で入ってくる。

イヨ「祭祀長様、あれはなんでしょう」

ざわめく見習いたち。

祭祀長「誰ですか、あなたは」

ヒミコ「宮殿の召使にございます。女王様から命を受けまして参りました」

ヒミコ、イヨの方を向いて、

ヒミコ「イヨさんであつてるかしら？」

きよんとするイヨ。

イヨ「は、はい」

ヒミコ「今日からあなたは女王様の跡継ぎ、次期女王として宮殿に来て頂きます」

イヨ「へ？」

騒ぎ出す見習いたち。

見習い「うそ！ 宮殿ってあのヒミコ様の住む宮殿!？」

見習い「イヨが次期女王!？」

祭祀長「皆の者、静まりなさい」

全くいうコトを聞かない見習いたち。

祭祀長、手を合わせてから手を叩く。

祭祀長「静まりなさい！」

見習いたちは強制的に口を閉じ、一瞬にして静寂に包まれる。

祭祀長「……にわかには信じがたい話です。本当にあなたが宮殿の者であるという証拠は？」

ヒミコ「ええ、これを」

ヒミコ、石板を見せる。石板には宮殿の紋章が記されている。

祭祀長、頭を下げる。

祭祀長「ご無礼をお許しください。でも、どうして？」

ヒミコ「それは、彼女が優秀な鬼道使いだからと申しておきましょう。

女王は彼女の類まれなる力を求めているのです」

ヒミコ、トヨの方に向き直す。

ヒミコ「そして、あなたには選択する権利があります。どうしますか？」

トヨ「私の力が役に立つ……分かりました。喜んでお受けします！」

ヒミコ「少し驚いた様子で」……いいでしょう。それでこそ時期女王にふさわしい在り方かもしれません。それではついてきてください」

○北内郭・門の前

二人、宮殿に着く。

ヒミコ「ついたわ、ここが宮殿よ」

トヨ、宮殿を見渡す。

上級の巫女や官吏たちが行き交っている。

トヨ、目を輝かせている。

しかし何やらあわただしい様子。

ヒミコ、横を通り過ぎようとする侍女に話しかける。

ヒミコ「あの、すみません。一体何があったのでしょうか？」

巫女「あなた見ない顔ね。まあいいわ、特別に教えてあげる。今朝、神器の内一つが盗まれたらしいのよ。幸い、シグリさまの結界に検知されて、現場にいた三人を捕まえたみたいなんだけど、誰もやってないというのよ。だからヒミコ様に予言をしていたかどうかとしたんだけど、どうもヒミコ様がいらっしやらないようで……」

ヒミコ「なるほど……ありがとうございます」

ヒミコ、深く一礼。

トヨを連れて去る。

○北内郭

トヨの手を握って足早に歩くヒミコ。

トヨ「どうされたんですか？」

ヒミコ「(独り言のように)もう少し段取りを取りたかったんだけど、仕方ない」

ヒミコ、回りを見渡して竪穴式住居の中に入る。

○北内郭・竪穴式住居・中

人ひとり入れるサイズの土器が並ぶ室内。

ヒミコ、そのうち一つの土器の蓋を外し、中に入る。

トヨ、啞然とする。

ヒミコ「さあ、こっちょ」

○北内郭・隠し通路

ヒミコ、トヨを連れて通路を進む。

トヨ「宮殿には行かないんですか？　なんでこんな通路を……？」
ヒミコ「いいえ、その宮殿にいま向かっているわ」

○宮殿・裏庭

林の中に建てられた小屋から出てきた二人。

ヒミコ「あそこから宮殿に入るわ」

指さした先には宮殿の真裏に聳え立つ巨木とそこから宮殿にかけられた橋が見える。

○宮殿・最上階のベランダ

橋を渡ってきた二人。

ヒミコ、何の遠慮もなく扉を開けて入る。

ヒミコ「さ、遠慮せず」

トヨ「あなたは一体……」

奥の方で騒がしい音がする。

ヒミコ「つと、まづいわね、早くいかないと……あなたはここにいて」

装束を持って、小走りで降りていくヒミコ。

一人残されたトヨ、恐る恐る扉をくぐる。

○宮殿・本殿・中

スサノオ(42)が容疑者の一人の胸ぐらをつかんで問いただしている。

スサノオ「貴様がやったんだろ！　いいかげん吐きやがれ！」

下っ端「違います！　俺じゃありません！　本当です！」

スサノオ、下っ端を放り投げる。

スサノオ「くそっ」

容疑者たちを取り囲むように座っている七神官たちのうちのひとりであるアラタ(19)が横にいるシグリ(28)に話しかける。

アラタ「ひえーおっかねえなスサノオの旦那、あれじゃどっちが罪人か
分かんねえや」

スサノオ「若造、もう一度言ってみな」

アラタ、口笛を吹く素振り。

ヒミコ「皆の者、待たせた」

ヒミコが御簾越しに現れる。

スサノオ「ヒミコ様……！」

ヒミコの後をこっそりついてきたトヨ。

女王の恰好をしたヒミコが御簾の前に立っているのを目にする。

驚きで思わず口に手を当てるトヨ。

ヒミコ「事のあらかたは把握しておる。仔細を話せ」

スサノオ「（ひざまづいて）はっ。あれは先ほどのことです。こやつらに

本殿の痛んだ個所を修理させていたところでした」

シグリ「そのとき、私の結界が反応したのです。すぐに結界で出られないようにし、向かいました。そして、調査すると神器——八尺瓊勾玉が亡くなっていたのです。そこで結界の中にいたこの三人を捕縛しました。この結界は、ヒミコ様以外の者が神器をもって通ろうとするのを防ぎます。それはつまり、この中の誰かが神器を盗もうとしたこと

」

ヒミコ「結界に反応したのは誰だ」

スサノオ、修繕師Bを指さす。

スサノオ「こいつです。工具箱に神器を入れ、持ち去ろうとしていました」

ヒミコ「それは勾玉ではないのだな」

スサノオ「はい、神力が込められた土偶でした。だから、勾玉もこいつが盗んだと思われます」

修繕師B「いいえ、私はやっていません！」

目を帯で隠され、拘束された修繕師たちを一瞥するヒミコ。

ヒミコ「それでは誠定の儀を行う。ミナギ、頭蓋の用意を」

ミナギ「（おじぎをして）は」

× × ×

ミナギ（74）から鹿の頭蓋が手渡される。

舞台裏からその様子を見るトヨ。

× × ×

鹿の頭蓋骨が火にかけられている。

ヒミコ「それでは」

ヒミコ、目を閉じ、頭蓋骨に向かって念じるように手をかざす。
訝しむように見つめるトヨ。

頭蓋骨がひび割れる。

ヒミコ、目を見開いて、

ヒミコ「……見えました。勾玉を盗んだ罪びと——それはあなたです」

ヒミコが修繕師Aを指さす。

修繕師A、狼狽する。

修繕師A「……なんで、なんで、何で分かるんだよ！」

スサノオ「詳しくは衛兵詰め所で聞こうか」

スサノオ、修繕師Aを抱え上げ、そのまま去っていく。

× × ×

舞台裏から見ていたトヨ、あっけにとられていると思わずこけてしまう。

トヨの姿が広間の者たちに見つかってしまう。

トヨ「あ」

ざわめく神官たち。

ヒルコ「誰だ貴様は！」

慌てるトヨ。

ヒミコ「静まりなさい。無礼です、ヒルコ。かの娘は私の後継、次期女王である」

アラタ「ヒミコ様の後継者!？」

ヒルコ（26）、土下座をする。

ヒルコ「大変ご無礼をおかけしました。申し訳ございません」

ヒミコ「よい。（トヨに向かって）せっかくの機会だ、ここで名乗るがよい」

トヨ、緊張で背筋を正す。

そして舞台上がる。

トヨ「は、はい。私はトヨと言います。南の祭祀殿から来ました。どうぞよろしく願います」

トヨ、深々とお辞儀。

毅然とした態度に感心する神官たち。

シグリ「急なことで私も驚きました。ヒミコ様のことですから我らは信じるのみです。しかし、後継を育てるということはヒミコ様は女王の席から外されるということでしょうか？」

ヒミコ「いずれはそうなるでしょう。ですが案ずることはありません。この娘は私が見込んだ優秀な素質の持ち主です。私の予言が外れたことがないのはあなた方がよくお知りでしょう？」

シグリ「その通りでございます、ヒミコ様」

そのとき、鐘が鳴る。

ヒルメ「もうお昼ですね」

ヒミコ「そのような時間か。そろそろ持ち場に戻らねばならぬ時間であろう。ではこれにて解散とする」

神官たち、一礼して去っていく。

× × ×

神官たちが全員去り、ヒミコとトヨが残っている。

ヒミコ「挨拶が遅れたわね、私がヒミコ。このヤマタイコクの女王。そしてあなたをここへ連れてきた巫女の正体よ」

トヨ「あなたが、ヒミコ様——」

ヒミコ「ええ、びっくりさせてしまったかしら？」

トヨ「——嘘です」

ヒミコ「え？」

トヨ「嘘ですよ。あなたはヒミコ様じゃありません」

ヒミコ「え、いや私がヒミコよ!? この装束だって、この髪飾りだって、ほら」

ヒミコ、自身の身に着けているものを見せる。

トヨ「私は信じません。だって……だって、ヒミコ様はヤマタイコク随一の鬼道使いです。ですが、先ほどの占術は、神力が一切感じられませんでした」

ヒミコ、押し黙る。

ヒミコ「……私はヒミコよ。しかし、あなたや、このクニの民たちが想像するような鬼道に優れた女王ではないの。いえ、はじめからそんな人はいなかった」

トヨ「そんなの嘘です」

ヒミコ「信じられないかも知れど、本当よ」

トヨ「鬼道の力を持たない人間が女王になるなんて、そんなこと……では一体先ほど、あの盗人を見定められたのは何だったというのですか？」

ヒミコ「いい質問ね、あれは事前の知識と相手のことを良く観察すればわかることだったのよ」

トヨ、首をかしげる。

トヨ「どういうことですか？」

ヒミコ「あそこにいたのは修繕師たちだけだったわよね。でも、一人だけあるものが無かった——それは、職人に現れる手のひらのマメや厚くなった皮膚。それが犯人には見られなかった」

トヨ「そんなところを……でも待ってください、もしかしたらあの修繕師は新米の方だったかもしれないですよ」

ヒミコ「それはないわ。本殿の修繕を任されるほどの修繕師は玄人の職人でもそういない、みな苦勞と誇りが手に表れているものよ——と、まあこんなところ」

トヨ、感心そうにみつめている。

ヒミコ「これが女王ヒミコの本当の顔。鬼道の才なんて一切ないただの凡人なのよ、私は」

突如、銅鐸がやかましく鳴り響く。

ヒミコ「これは……!!」

○東内郭・物見やぐら

見張りが遠見の術で森の方を見ている。

見張り「戦々恐々とした様子で」こりゃあ、まずいことになったぞ」

見張り、下の階に向かって叫ぶ。

見張り「おい！ 早くシグリさんを呼べ！ クナコクのやつらが攻めてきた！ その数——」

○宮殿・正殿・中

警報が鳴り響く。

二人の脳内にシグリの声が響く。

シグリの声「緊急通達、緊急通達。東やぐらより、クナコクの軍勢が攻めてきたとの報告。その数約——一千」

二人「一千!」

シグリの声「わがクニの結界は健在です。かの蛮族の指一本たりとも入れることはないでしょう。しかし、警戒を解かず、万が一の場合に備えて避難を勧告します」

シグリのテレバシーが切れる。

トヨ「どうしますか、ヒミコ様」

ヒミコ「私は東門に向かうわ、あなたはついてきちゃダメ」

そこにミナギがやってくる。

ヒミコ「ミナギ、移動の手配を」

トヨ、本殿から去っていくヒミコを見る。

○結界

ヤマタイコクの周囲に張り巡らされた結界の前。

ヒミコ、衛兵を連れてやってくる。

ヒミコの顔は文様が描かれた布で覆われている。

結界の向こう側にはヒミココ(28)とクコチヒコ(18)、そして大勢の兵を後ろに従えている。

ヒミココ「これはこれではごきげんよう。私の名はヒミココ、クナコクの長です。そこのお方が民にさえもその顔を見せないという、顔なしの女王かな」

スサノオ「貴様っ!」

ヒミコ「よせ、スサノオ。クナコクの王ヒミココ、名前は耳にしておる。訳あって今は姿を見せることはできないが、承知していただきたい」

ヒミココ「それは残念だ」

ヒミコ「それで後ろに連れている兵たちは一体なんだ」

ヒミココ「話し合いをしにきたのですよ、ヒミコ殿」

スサノオ「冗談を言いに来たわけではないよな」

ヒミココ「まさか、本気だ。我々は火が照り付ける灼熱の日も骨が凍るような吹雪の日も戦を繰り返してきた。それで今や互いに疲弊しきっているではないか。これ以上、同胞が血を流す姿を見たくはないのはお互い様だろう。我々は言葉がある、知恵がある。なら話し合いで決めるようではないか」

スサノオ「けッ、どの口がいうか。元と言えば貴様らが我がクニの農作物を強奪したのがきっかけであろう?」

ヒミココ「だからこそだ、我らが重ねてきた罪と其方らが積み上げてきた業をここで清算しようじゃないか。もちろん、断る理由はないと思うが。もし、そちらにその気がないのなら」

ヒミココ、片手を上げる。

後ろの兵たちが一斉に構える。

スサノオ「結局、力業じゃねえか」

ヒミココ「あくまで手段だ、目的じゃない」

ヒミコ「……分かった。話を受けよう」

スサノオ「ヒミコ様!」

ヒミココ「その代わり条件がある。後ろの兵たちを見えない所まで下がらせなさい。民たちが不安がる」

ヒミッコ「承知した。あと、話し合いに参じるのは私とこのクコチヒコだけでよい」

ヒミッコ「なんですって？」

ヒミッコ「言っただろう、武力で解決するつもりはないと」

ヒミッコ「……そうか。ではシグリ、この者たちだけを結界の内に入れろ」
シグリ「はっ」

シグリ、結界に手を当て、ヒミッコとクコチヒコを見つめる。
結界に波紋がうねる。

シグリ「……これでこの二名のみであれば、入ることが許されます」

クコチヒコ「信用できません。ここは私が」

ヒミッコ「よい」

ヒミッコ、平然と結界を潜り抜ける。

ヒミッコ「ほら、平気だ」

クコチヒコ「はっ」

続いてクコチヒコも結界を潜り抜ける。

その様子を盗み見しているトヨ。

クコチヒコがトヨの方に振り向く。

咄嗟に身を隠すトヨ。

○森

ヒミコ一行が帰路を進んでいる。その前方には兵士たちに槍を向けられながら進むヒミッコとクコチヒコ。

ヒミッコ、振り向いて布に覆われたヒミコの表情を見透かしたように見る。

すぐさま、兵士に槍を向けられ、肩を竦める。

スサノオ（小声で）ヒミッコはかなり腕の立つ豪族です。俺も何度か手を合わせたことがあります。異国の地では鬼という怪物がいるそうですが、あれはまさにその通りです。十分にご警戒を」

○宮殿

アラタ、拳を床に叩きつけて

アラタ「のめるわけないだろ、そんな要求！」

ヒミッコ「分からぬな、これほどいい条件もないだろう」

アラタ「都合がいいのはてめえのクニだけじゃなか！ ヤマタイコクを統治下において連合クニをつくるだあ？ どこにこっちの利があるんだよ！」

ヒミッコ「よく考えてみたまえ。其方らのクニはいささか女性が多いよ。うだ。それゆえ、力を必要とする作業に弱い。一方、我がクニは男の生まれが多くてな。そこでそなたらのヤマタイコクと我がクナコクが一つのクニとなることで非の打ちどころない理想のクニができると思うのだからがだろう」

ヒミッコ「つまり、繁栄のためということか」

ヒミッコ「そなたたちにとっても悪い話ではない。北の大海原を超えた先には我々より栄えている大国があるそうじゃないか。こちらには武

力がある。我々の力をもってすれば、いずれは張り合えることもかなうかもしれん」

ヒミコ「……それがあなたの答えですか。なら、私からの返事は一つです。断じて受け入れるつもりはありません」

ヒミコ「何？」

ヒミコ「確かにあなたの考えは理にかなっている。ですが、民の心が全く計算に入っていない。そのようなクニはどうあれ滅びましょう」

ヒミコ「……」

ヒミコの目に殺気が灯る。

クコチヒコ「ヒミコ様……うっ！」

クコチヒコ、苦しんで倒れる。

ヒルメ「きゃあっ！」

ヒミコ、殺気が消える。クコチヒコを抱える。

ヒミコ「死んではない。身体を崩したようで最近はこうなることがある。誰か休ませてくれか」

ヒルメ「なら、私が……」

ヒルメ（23）、クコチヒコを案内する

ヒミコ「話は一旦中断だ。また、明日続きをしよう」

本殿を去るヒミコ。

○宮殿（夜）

夕食。トヨとヒミコの前に豪華な食事が置かれる。

トヨ「こんな豪華な料理、初めて見ました！」

トヨ、団子を手を取って、ほおぼる。

ヒミコ、微笑ましい様子で、

ヒミコ「慌てて食べちゃだめよ……ああ、こんな時間が続けばいいのに」

トヨ「何かおっしゃいました？」

ヒミコ「いいえ、何も」

○宮殿・女王の部屋（夜）

寝具に着替えた二人、眠っている。

○トヨの夢

穏やかな市街地。近未来的な風景で、人々が楽しそうに行き交っている。

トヨ「ここは……？」

近くの舞台でサーカスが行われている。

楽しそうに笑う市民たち。

トヨ、思わず頬が緩む。

突然の頭痛。

トヨ、座り込んでしまう。

景色がだんだんと荒れ果てたものに変わっていく。

やがて、市街地は戦争真ただ中の風景に置き換わる。

爆風が吹き荒れる公園。舞台も燃え上がっている。

トヨ「なに、これ——」

○宮殿・女王の部屋（翌朝）

トヨ、目を覚ます。

トヨ、苦し気に呼吸をする。

トヨ「あれは——」

廊下の方でドタバタとあわただしくしている。

トヨ、廊下に出ると、ヒミコと側近たちが集まっている。

トヨ、野次馬の中に入る。

その光景を見て吐いてしまう。

トヨ「おえっ、うっ、う……」

ヒミコ「トヨ！　いたの!？」

ヒミコ、トヨを介抱する。

トヨ「そんな、なんで……？」

部屋の中にはミナギの死体が横たわっている。死体は袈裟切りにされている。

ヒミコ「分からない、だけど今朝ヒルメが発見したらしいわ。そうでしょう?」

ヒルメ「は、はい。ミナギさんは祭祀長なので毎朝祭祀場で巫女たちをまとめるそうです。いつもは誰よりも早く来るのに、今朝は時間になっても来られなかったので、副祭祀長である私が見に来たんです。それなら——」

ヒミコ「このありさまになっていたと」

ヒルメ「はい、でもなんで、誰が一体こんなひどいことを」

スサノオ「そんなのわかりきってる。この宮殿の中に敵国の王がいるんだからな！」

スサノオ、ビシッと指さす。その先には、騒動を気にしてやってきたヒミコとクコチヒコ。

ヒミコ「なんだいきなり。このクニではそれが挨拶なのかい?」

ヒルメ「ふざけるんじゃない人殺し!　（現場を指さして）ミナギさんはあなたが殺したんでしょう!？」

ヒミコ「何を言ってるんだ?」

ヒミコとクコチヒコ、現場を見る。

ヒミコ「ほう、これはまた……」

ヒルメ「なんでミナギさんを殺したんですか?　話し合いで解決しようって言ったのはあなたなのに!」

ヒミコ「分からないな、勝手に話を進められては困る。いつ私が殺したと決まったのだ?」

ヒルメ「それは殺す理由があるのがあなたたちだけだからでしょう」

ヒルメとヒミコの言い合いをよそに現場を見る。

ミナギの死体に吸い込まれるように見つめる。

そんなトヨの脳裏に夢で見た荒れ果てた景色や神々しいヒミコ（アマテラス）の姿の光景が流れ込む。

トヨ、あまりの頭痛にしゃがみ込む。

トヨ「うっ!　うぐっ……!」

周りの人たちが話すのをやめ、しゃがみ込むトヨに注目する。

ヒミコ「トヨ!？」

少しの沈黙の後、トヨが熱に浮かされたように立ち上がる。

トヨ「今、ここに生贄が一つ捧げられん。神に近き四つの血肉が備えられし時、この世界に太陽は昇らん」

トヨ、またも気を失う。

ヒミコ「トヨ！」

ヒミコ、倒れるトヨを抱きかかえる。

○本殿

ヒミコたちが座っている。

そこにヒルメが戻ってくる。

ヒミコ「はい、トヨ様は無事です。今は休んでおられます」

ヒミコ「そうか……」

シグリ「ヒミコ様、先ほどのトヨ様の豹変とあの言葉……生贄などと口にしていましたか」

ヒミコ「あれはおそらく予言よ」

シグリ「とすれば、あと三人……神に近い血肉、つまり私たちの誰かが犠牲になるということでしょうか」

ざわめく神官たち。

ヒルコ「ヒミコ様のお力で解決できないのでしょうか」

アラタ「そうか、ヒミコ様のお力でなら！」

ヒミコ「……ええ、解決してみせましょう……しかし、謎が巨大すぎる。

相応の時間を要するかもしれん」

ヒミコ、シグリに向かって、

ヒミコ「シグリ、ここに市民を立ち入らせるわけにはいかない。ただちに用意を」

シグリ「御意」

○宮殿、ミナギの部屋

ミナギの死体がある部屋。

巫女たちが札の付いた縄を現場の周囲に張り巡らせる。

部屋の中でシグリが手を合わせて、ぶつぶつと呪文を唱えている。

縄が呪文に反応し、怪しげにひかる。

シグリ「ヒミコ様、これでこの部屋には関係者以外立ち入ることができません」

ヒミコ「ご苦労だ。下がってよい」

シグリ「はっ」

シグリ、部屋を出ていく。

ヒミコ「それと、トヨ、君も出なさい」

トヨ「え？」

ヒミコ「ここへ連れて来てからというものの不測の事態しか起きていないけど、こればかりは例外中の例外よ。ミナギの死体の傷——あれは万が一にも獣や事故が原因じゃない、確実に人の手によるものだわ。これがどういふことか分かっている？ 誰かが殺意を抱いているというのとよ。そんな中、君を守る自身はわたしにはない。外に出たら私直

轄の近衛兵がいるはずだから、事件が解決するまで詰め所にかくまってもらいなさい」

トヨ「いやです。そんなことしません」

ヒミコ「どうして？　もしかしたら君が生贄の一人にされるかもしれないのよ。そんな時、君を守る力が私にはない。だからお願い。」

トヨ「それでも嫌です。ヒミコ様についていきます」

ヒミコ「どうしてそこまで？」

トヨ「私はヒミコ様の跡継ぎです。たしかにヒミコ様には鬼道の力がないのでしよう。ですが、クニを守ろうとするそのお気持ちは誠のものであると確信しました。それにこれは試練でもあると思うのです。ヒミコ様の跡継ぎになるにはこの程度乗り越えなきゃ王の器ではないのでしょうか」

真剣な眼差しのトヨを見つめるヒミコ。

ヒミコ「……分かったわ。では、これよりトヨ。あなたを次期女王後継者として私の助手に任命します。覚悟はいい？」

トヨ「はい！」

○宮殿・女王の部屋

ヒミコとトヨが座っている。二人の部屋には石板があり、ヒミコは石板に貝殻の破片で図を描いている。

ヒミコ「まず事件の流れをまとめろわ。ミナギの遺体が見つかったのが今朝のこと。毎朝行われる礼拝に来なかったミナギをヒルコが呼びに行ったことで発見につながった。ミナギが発見されたのが今朝のこと

。私たちがミヤギを見たのは昨日の会議が最後。なら殺されたのは夜中になるわね。ここまではいい？」

トヨ「はい。ですがちょっといいですか？　ヒミコ様は先ほど犯人はこの中にいるとおっしゃっていましたが、なぜそんな断言ができるのですか？」

ヒミコ「それはね、この宮殿にも結界が張られているからよ」

トヨ「シグリ様の結界ですか？」

ヒミコ「そう、これは本人に聞いた方が早いわね」

○宮殿・本殿

ヒミコとトヨ、そしてシグリが向かい合っている。

シグリ「私の用いる鬼道は特定のものを通さない結界術です。人は生命の源流である魂とその器である肉体から成り立っています。そして、私の結界はふるいのようなものです。私が認めた魂と肉体を持つものしか通さない、絶対の障壁です」

トヨ「じゃあ、ヒミコとクコヒコが結界を潜り抜けた時も——」

シグリ「ご明察です、トヨ様。私が彼らの肉体と魂を読み取って、結界を通ることを許しました。ですので、クナコクの他のものは我がクニに入れることは断じてないでしょう。もし無理にでも入ろうとすればその時は——」

○森・結界前

クナコクの兵の一人が結界に指を触れる。

瞬間、とてつもない反発力で吹っ飛ばされる。

○宮殿・本殿

シグリ、トヨとヒミコに向かって、

シグリ「体が吹き飛ばされます」

トヨ「な、なるほど」

ヒミコ「トヨ、あなたヒミコ様が結果を通るのを見たと言いましたか？ あの時、私はついてきてはいけないといったはずですが？」

トヨ「あ、ご、ごめんなさい！」

ヒミコ、少しむすつとする

シグリ、くすつと笑う。

ヒミコ「シグリ、何かおかしいか？」

シグリ「いえ、なんだかヒミコ様のまとう空気が温くなったような感じがして。なんだか新鮮さを感じます」

ヒミコ「そ、そうか」

シグリ「あと、トヨ様。あなたは、昨日まで祭祀場にいたそうですね。あ

そこでも毎朝礼拝があったでしょう？ 実はあの礼拝のおかげでこの

クニの結果は守られているのです。皆の祈りの力がこのクニを守る壁となっていたのです」

トヨ「私たちの力が――」

そこに衛兵がやってくる。

衛兵「失礼します。ヒミコ様、アラタ様が大事な話があるとのことですよ」

× × ×

アラタがヒミコの前に座っている。

ヒミコ「それで、話とはなんだ？」

アラタ「実はミヤギを殺した奴、分かったかもしれないんです」

ヒミコとトヨ、顔を合わせる。

ヒミコ「それは誰だ？」

アラタ「我がクニの大臣の一人、シジマの爺さんです。昨日の夜、あの話し合いのことを考えていたんですが、考えれば考えるほど分かんなくなつて、憂さ晴らしに修練場に向かったんです。あれは真夜中だったか。その時、シジマの爺さんが出歩いているのを見たんです。だけど、シジマの爺さんの住かは逆方向でしょう？ それで今朝、ミナギが殺された……ほら、怪しいでしょう？」

ヒミコ、顎に手をやる。

アラタ「ヒミコ様の力が満ちるまで待つのが一番確実かもしれないんですけど、俺は早くこんな事件終わらせたい。なんなら、俺が今からでも爺さんを捕まえに行きます」

ヒミコ「それは許しません。捕まえたとして何の証拠もないでしょう。

言い逃れをされておしまいです」

アラタ「ならこのまま野放しにするってんですか？」

ヒミコ「そうとも言ってません。こちらでシジマの調査にあたらせてます」

」

アラタ「調査って誰がするんすか？」

ヒミコ「ふふ、それは秘密よ」

○宮殿・廊下

ヒミコとトヨ、歩いている。

トヨ「ヒミコ様、ちょっと疑問に思ったのですが」

ヒミコ「何？」

トヨ「アラタ様の言う通り、一度シジマ様を連れてきて儀式を行うのはどうでしょうか。昨日、神器を盗んだ盗賊を見破ったときのようなことを行うのです。ヒミコ様の言葉は絶対です。なので、もしシジマ様が犯人であれば自ら罪を告白するのではないのでしょうか。もし外れていても逆にシジマ様は犯人ではないことの証明になります」

ヒミコ「それはできないわ」

トヨ「为什么呢？」

ヒミコ「さっき私の言葉は絶対といったわね。だからこそよ。私の言ったことが真実になる。もし私がシジマを犯人と言えば、シジマが犯人かどうか関わらず犯人として決めつけられてしまう」

トヨ「そんなはずないです。もし無実なら自分はやってないと主張するはずですよ」

ヒミコ「たしかにそうね。でもそれは本人だけ。私が有罪と言ってしまえばその人は有罪になる。皆が崇めるヒミコ様の言葉はそれほどの強制力を持つんですよ」

トヨ「そんな……でもおかしいです。ヒミコ様は鬼道の力も使わず確実に犯人を見つけることができるのですか？」

ヒミコ「いいえ、昔に一度失敗したわ。推理を誤って、無罪の人を有罪人としてしまった。神託をやり直すといったけど、その時にはもう遅かった。それから私は絶対に誤った間違えないと決めたわ」

○宮殿・女王の部屋（夜）

部屋に戻ってきたヒミコとトヨ。

ヒミコ、箱の中からごそごそと何かをさがしている。

ヒミコ「あつた、これを着なさい」

ヒミコ、箱の中から一般巫女の装束を取り出し、トヨに渡す。

トヨ「これは？」

ヒミコ「変装用の巫女装束よ、といっても私のおさがりだけだね」

トヨ「これを着てどうするんですか？」

ヒミコ「決まってるじゃない。調査しに行くのよ」

○宮殿・裏口（夜）

女王の部屋の裏口から宮殿を出る。

建物の影から陰へ移りながら衛兵の目をかいくぐっている。

シジマ（68）の部屋に到着。

ヒミコ「いくわよ」

うなづくトヨ。

ヒミコ「せーの」

二人、部屋に突入する。しかし、中には誰一人いない。

トヨ「だれもいない……」

部屋の中には小型の土器や石板が並んでおり、それは研究室さながらの風景。

トヨ、おそろおそろの中へと進み、石板を手取る。

トヨ「ヒミコ様、シジマ様は何をされてる人なのですか？」

ヒミコ「シジマはね、薬についての研究しているわ。浄化の丸薬って知ってるかしら？」

トヨ「はい、人が病や瘴気に侵されたとき飲むことでたちまち回復する薬ですよ」

ヒミコ「そう、あれはシジマが生み出したのよ。だから、このクニでの病死がほとんど少ないのもそのおかげ」

トヨ「そんな方が人を殺したりするのでしょうか？」

ヒミコ「それを確かめるためにここへ来たのよ。なにか手がかりになるものはないかしら」

トヨ「ありました。これじゃないのでしょうか」

トヨ、棚の中から箱を見つける。

ヒミコ「私が開けるわ」

そう言っ箱のふたを開ける。

中には数枚の石板が入っている。

中身を取り出して読む。

トヨ「これは……神に至る薬の研究……禁足地、アマノイワト」

ヒミコ「なんですって……!？」

ヒミコとトヨ、シジマの部屋を出る。

その様子を外から見ているコウモリ。

○森(夜)

森の中を急ぐ二人。

きよろきよろとあたりを見回すトヨ。

トヨ「なんだか視線を感じませんか？」

ヒミコ「これは……まずい」

ヒミコ、急に立ち止まり、トヨがぶつかる。

トヨ「ちょ、ヒミコ様どうかされました？」

ヒミコ、トヨを手で庇う。

トヨ、ヒミコの前方を見る。

そこには熊がいて、二人を狙っている様子。

周囲からオオカミやイノシシが次々と現れる。

ヒミコ「ホント用心なこと。おそらくさっきの石板に獣寄せの呪いがかかっていたところかしら」

トヨ「どうします、ヒミコ様!？」

じりじりと追いつめられる二人。

ヒミコ「合図で付いてきて、三、二、一……」

ヒミコ、懷から包みを取り出して地面に投げつける。途端、煙幕が発生する。

ヒミコ「こっちへ!」

ヒミコ、トヨの手をとって走り出す。

× × ×

林の中を走り続ける二人。

彼女たちにコウモリが襲い掛かる。

ヒミコ「援助お願い！」

トヨ「はい」

トヨ、コウモリに向かって掌を突き出す。

風が巻き起こり、コウモリが飛ばされていく。

次は狼たちが二人を追いかける。

大きな川を渡る二人。

トヨ「任せてください！」

トヨ、川に手を当てる。途端、川が凍り、一本の道ができる。

凍りの橋を渡る二人。

渡り切ったトヨ、氷の橋に手を当て凍結を解除する。そして、今

度は川の中に大きな渦巻を作る。

トヨ「これで通れないはずだ」

ヒミコ「驚いた様子で」ありがとう、私が見こんだ以上の才能だわ。ア

マノイワトまでもう少しよ！」

トヨ「待ってください、あ、あれ……」

ヒミコ、トヨが指さす方向を見る。そこには、激流の中を突き進む

大熊の姿が。

トヨ「あれじゃあすぐ追いつかれてしまいます」

ヒミコ「どうやらここで食い止めるしかないようね」

トヨ「どうやってですか!? あの力の強さじゃ私の鬼道も役に立つかどうか――」

ヒミコ「いいえ、あなたの力が必要よ。だけど、それは君を大きな危険にさらすことになる」

トヨ「問題ありません。私はヒミコ様の助手です」

ヒミコ「分かった。力を貸してちょうだい」

× × ×

川を越えた大熊が林の中にやってくる。

その先にヒミコが仁王立ちしている。

ヒミコ「シジマには悪いわね、少し手荒にいくわよ」

大熊、威嚇の後、もう突進してくる。

ヒミコ「今よ！」

トヨ「はい」

木の上にいるトヨ、木に神力を込める。

木のつたが伸びヒミコの方へ向かう。

ヒミコ、鳶を手に取り、その勢いのまま走る。

木を蹴り上げてターザンのように木の上に乗る。

ヒミコ「ほら、行くわよ」

鳶を持ちながら地面に降り、別の木の上に乗り移る。

それを繰り返すヒミコ。

立体的かつ機敏に動き回るヒミコに翻弄される大熊。

気付いた時には全身を縛られている状態。

トヨ「ヒミコ様、すごい……!!」

ヒミコ「ふふつ、普段から偵察ばかりしてるとねいつの部屋にか身に着くのよね」

吠える大熊。

ヒミコ「トヨ、お願い！」

トヨ「はい！」

トヨ、手に持った蔦に神力を込める。

蔦がじわじわと凍っていき、やがて熊をも凍らせる。

トヨ「やりました！」

ヒミコ「ええ、お疲れ様」

額の汗をぬぐうヒミコ

トヨM「ヒミコ様、私よりも鬼道の力をつかいこなしていた。それもあの一瞬で」

○アマノイワト・洞窟（夜）

洞窟の中を進むシジマ。

シジマ「全く、せっかく神なる薬の開発にたどり着きそうなのになんだ、ヒミコ？ 生贄？ 私の崇高なる研究に横やりを入れるなど言うんだ、くそ」

シジマ、立ち入り禁止の境目に来る。

シジマ「やはりだ、ここだけ結界が通っていない。」

シジマ、縄を潜り抜ける。途端、体がぶるっと震え上がる。

シジマ「おお、満ち満ちたこの神力！ 質も量も一級ものだ！」

ヒミコ「シジマ、そこまでよ！」

シジマ、振り返る。そこにはヒミコとトヨの姿が。

シジマ「なっ！ なぜあなた方がここにいる!？」

ヒミコ「あなたの部屋にある資料を読ませてもらったわ。あなた、禁断の研究に手を染めたみたいね」

シジマ「アレを読んだのですか!? いや、おかしいそれなら獣たちが襲いに来るはず」

ヒミコ「それは私とトヨで逃げ切ったわ。安心して、殺してはいないわ」

シジマ「なんと……!？」

トヨ「シジマ、なぜこんなことをしたの？」

シジマ様「何を言っておる。私がそんなことするか!？」

シジマ、二人をじっと見つめて、

シジマ「……はあ、もはやここまでか。分かった、全て話そう」

× × ×

三人は座っている。

シジマ「私が出していたのはイザナミの霊薬でございます」

トヨ「イザナミの霊薬？」

シジマ「この薬は万能の効能があるとされているそうです」

トヨ「いるそう……それはシジマ様も分らないんですか？」

シジマ「ええ、私もその薬を見たことはありません。しかし、ある時私は聞きました。アマノイワトを源流とする川の水を飲むとたちまち生気がみなぎると。ここへ来るとき大きな川があったでしょう。あの川がそれでした。私は彼らに問い詰めてみると、どうやら口伝によって受

け継がれていたらしいのです。そして、イザナミの霊葉がこのアマノイワトにあるらしいと」

ヒミコ「それでここへ探しに来たということですね」

シジマ「はい」

トヨ「では、昨夜ミナギ様の家に向かったのは」

シジマ「イザナミの霊葉がもし手に入ったら飲んでほしいと頼みに行ったのだ。私は彼女に死んでほしくなかった。彼女が老い、不治の病に苦しむ姿を見たくなかった。わしはこれまでに何度も頼んだのだ。だが、彼女は断った。定められた死に抗うわけにはいかないと。なのに、なぜ彼女が殺されなければならなかった！ まだ、わずかばかりといえど時間はあったというのに！」

シジマ、ヒミコにすがりつく。

シジマ「どうかお願いですヒミコ様。せめて、このアマノイワトに霊葉があるかどうかだけでも教えていただけないでしょうか!？」

ヒミコ「それはできない」

トヨ「ヒミコ様！」

ヒミコ「この領域は天上に住みし神のもの。私であろうと一切伝えることはできない」

シジマ「そんな……あああ！」

○宮殿（夜）

帰ってきた三人。

すると、アラタが向かってくる。

アラタ「ヒミコ様！」

走ってきて息を切らしているアラタ。

ヒミコ「どうした？」

アラタ「大変です。今度はシグリが……！」

驚くヒミコたち。

○宮殿・ヒルコの部屋

ヒルコが倒れており、そこに一同が集まっている。

そばでヒルメが泣きわめいている。

ヒミコ「ヒルコ……」

ヒルメ「私が祭祀の仕事を終えて戻ってきたら……うわああああ！」
いたましい表情になる一同（ヒミコたちをのぞいて）。

ヒルメ、ヒミコにしがみついて、

ヒルメ「ヒミコ様、どうか一刻も早く事件を解決してください！ お願いします……」

その様子を見ていたトヨ、急に頭痛に襲われる。

トヨ「うっ！ また……！」

しゃがみ込むトヨ。脳裏に未来の映像が流れ込む。

逃げ惑う人々、祈りを捧げる人。

ヒミコ「トヨ、大丈夫!？」

またも熱に浮かされたように立ち上がる。

トヨ「ここに二つめの供物が捧げられた」

シグリ「予言……！」

ヒルメ「お願いします。誰がこんなことをしたんですか!? 教えてください！」

ヒルメ、トヨに縋りつく。

トヨ、ヒルメを一瞥して、

トヨ「……今日の夜、鎮魂術に長ける神官の男がひとり殺されるであろう」

トヨ、気を失う。

○宮殿・浄化の間

トヨ、目を覚ます。

トヨ「ここは……」

ヒミコ「宮殿にある浄化の間よ」

トヨ「……ヒルコ様は!？」

ヒミコ「ひとまず現場は封鎖してるわ」

ヒルコの死体の現場、しめ縄で封鎖されている。

トヨ「私が気を失ったということは……」

ヒミコ「ええ、また予言を口にしたわ」

× × ×

トヨ「次の生贄がアラタ様……!？」

ヒミコ「ええ、予言ではそう言っていたわ。もし予言が本当なら、アラタが殺されてしまうでしょう」

トヨ「ごめんなさい。私の力が及ばないばかりに……この力を制御できれば」

ヒミコ「謝ることないわ、これは大きな手掛かりになる。おかげでアラタの近辺に衛兵をつかせ、厳重警戒態勢を敷いている。予言の通りにはさせないわ」

部屋の外からヒルコの声。

ヒルメの声「あの」

ヒミコ「いいわ、入ってきなさい」

ヒルメ、部屋に入る。

ヒミコ「ヒルコ、大丈夫か？」

ヒルメ「はい、少し落ち着きました。それで、私が呼ばれた理由は……？」

ヒミコ「あなたの能力のことをトヨに教えてあげたいの。いいかしら？」

ヒルメ「はい、ヒミコ様のご命令とあれば……私の鬼道は魂を入れ替えることができます」

トヨ「魂の入れ替え？」

ヒルメ「はい、私は兄——ヒルコと魂を入れ替えることができます。物心ついたところからできるようになっていました。他の方と比べてあまり使いどころのない術ですが、これはあくまで副産物です。私たち兄弟の鬼道は共鳴です。兄様の近くにいるとお互いの傷が癒えるのです。兄様はよく戦に出られていましたから、私も同行していました」

トヨ「あなたも前線に出ていたの？」

ヒルメ「いえ、私は戦う力がないので、後方で待機していました。兄様が戦線から戻って来られたときにこの力で傷を癒していました。この力は相手が近くにいると反応します。なので、私が昔迷子になった時には、兄さまが私を見つけ出してくれて……なのに……」

泣きだすヒルコ。

○宮殿・客間（夜）

ヒミッコとクコチヒコが話している。

ヒミッコ「奴らは？」

クコチヒコ「どうやら次に殺されるであろう人物を警護しているようです」

ヒミッコ「例の予言というやつか。全く、このクニのやつらは奇妙なことをする」

クコチヒコ「……ヒミッコ様、このクニの民はあの女王を神のように崇拜しています。もしこのクニとわがクニを合併できたとして、このクニの民はヒミッコ様の意に背くのではないでしょうか」

ヒミッコ「クコチヒコ、一つ間違っているぞ。合併といったな、それは違う。正しくは支配だ。交渉を成功させ、このクニに百人でいい、兵を入らせることができたなら、彼らにこのクニの民の半分を襲わせる。あとは私が民を管理する。なに、逆らえば殺すだけだ。やがて、従わぬものはいなくなる」

クコチヒコ、恐れで震える。

そして、気を失う。

ヒミッコ「またか……無理をするなというのに」

ヒミッコ、クコチヒコの正体不明の異変に気づく。

ヒミッコ「クコチヒコ……違う。お前は誰だ？」

○宮殿・前（夜）

アラタを取り囲んで衛兵やシグリたちが軽度している。

アラタ「なんかこう、むずがゆいなあ」

シグリ「我慢しろ、お前が生きたままこの夜を超えれば、予言は外れたことになる。さすれば、一連の殺人も止まるかもしれない」

アラタ「だけど、ヒルコを殺した奴だ。アイツも並みの兵士じゃ太刀打ちできないほどの腕の持ち主だ。殺した奴も相当な実力者だろうな」

ヒミッコとトヨがやってくる。

ヒミッコ、装飾が華々しい剣を持っている。

ヒミッコ「待たせた」

アラタ「ヒミッコ様！ それは？」

ヒミッコ「我がクニに伝わる神器が一つ。草薙の御剣である。私も防衛に参じよう」

アラタ「な、ヒミッコ様！ 俺ごときにそんな！」

ヒミッコ「犯人を見つけ出せず、大事な家臣を二人も失った。ここで屈辱を果たさせてはくれないか」

おそれおのくアラタ。

ヒミッコ「さあ、皆の者——！」

突如、宮殿のハズレのほうから爆発が。

ヒミコ「何!？」

トヨ「あそこはたしかヒミコたちがいる——」

ヒミコ「皆の者はアラタの警護を続けろ！ トヨ、行くわよ！」

○宮殿・ヒミコの部屋

駆けつける二人。

部屋は爆発で崩壊している。その中にクコチヒコが倒れている。

二人、クコチヒコのもとに駆け寄る。

トヨ、クコチヒコを介抱しようとするもためらう。

しかし、ヒミコが躊躇なくクコチヒコを介抱する。

ヒミコ「クコチヒコさん、大丈夫！」

クコチヒコを揺さぶる。目を覚ますクコチヒコ。

クコチヒコ「うっ……！ 離せ！」

ヒミコに抱かれていることに気づいたクコチヒコ、慌てて離れる。

。

傍らで起きた爆発の跡とヒミコの死体を見る。

クコチヒコ「あ、あ……ヒミコ様！」

ヒミコのもとへ駆け寄る。

クコチヒコ「貴様ら、わが主に何をした！」

トヨ「それはこちらのセリフです！ これは一体!？」

クコチヒコ、頭を抱える。

クコチヒコ「……たしか、貴様たちが今晚殺されるであろう男を警護すると言っていたな。私たちには守る義理もないので、この屋敷に留ま

っていた。そして……なぜだ、ここから全く思い出せない」

クコチヒコの頭痛が強くなり、気を失う。

○宮殿・浄化の間

寝かされているクコチヒコ。

まどから淡い朝日が差し込む。

○宮殿

だんだんと夜が明けてくるころ。

シグリ「夜が明けましたね……アラタ様は無事ですが、予言を回避した

といえるのでしょうか——」

○宮殿

広間に全員集まっている。

スサノオ「本来、アラタが殺されるはずだったが、ヒミコが死ぬとは」

ヒルコ「ヒミコを殺した犯人とこれまでの殺人の犯人は同一人物なの

でしょうか？」

ヒミコ「断定はできないわ。ツクヨミはこういった。神に近き純潔をも

ってアマテラス神を呼び出すと。だが、ヒミコは鬼道の力を持って

いない。ならば生贄として殺す理由がないはずだ」

シジマ「結局、事態は変わらぬまま——いえ、悪化しておりますな。自クニの王が敵クニの地で命を落としたと知れば、クナコクの民たちは黙ったままではおかないでしょうな。結界の周囲にいる兵たちがすぐにも戦いのろしを上げましょう」

緊張感のはしる。

トヨ「でもシグリ様の結界があれば、いかな兵士であろうと立ち入ることはできないんじゃないですか？」

シグリ「概ねおっしゃるとおりです。しかし、よくお考え下さい。彼らがここに来てからすでに三日経過しています。その部屋、ひたすら耐えていたと思いますか？」

トヨ「あ」

シグリ「いかに常識離れた彼らであろうと数日間飲まず食わずでいれば全体の士気が下がります。その対策として、彼らは交代交代に駐留していたのです。つまり、これはもとより長期戦になることを想定していたのです。彼らが結界内に入れずとも、私たちをこのクニから出さないことで徐々に侵攻していくことでしょう」

アラタ「それじゃあこのままじゃ俺たちは負けるってことか？」

シグリ「その可能性は否定できません」

スサノオ「じゃあとるべき道は一つか。クコチヒコが起きて、奴らに伝わる前に全面戦争を仕掛ける。ヒミコ様、ご決断を」

ヒミコ「……それはできません」

スサノオ「ヒミコ様！今はこのクニが存続できるかどうかの分水嶺なんです！どうかよくお考えになってください！」

ヒミコ「(トヨにしか聞こえない程度の小声で)やはり私には無理なんだろうな」

ヒミコ、割り切ったように顔を上げる。

ヒミコ「……分かった。明日の朝、クナコクに対しての総攻撃を行う。至急、戦闘要員は兵士の用意を、非戦闘要員は村人たちの避難の用意を」

各自「はっ」

それぞれ、急ぎ足で去っていく。

物憂げな表情のヒミコ、それを心配そうに見るトヨ。

○東内郭

スサノオが兵を集めている。

スサノオ「我々は明日の朝、クナコク軍に対して総攻撃を行う。だが、我々にはヒミコ様がついておる、きっと我らを勝利に導いてくれることであろう！」

雄たけびを上げる兵士たち。

その様子を見るトヨ。

トヨ「私にもっと力があれば……」

○森(夜)

トヨ、アマノイワトへの道を進む。

○アマノイワト・洞窟(夜)

トヨ、洞窟を進み、立ち入り禁止の縄をくぐってさらにおくへ進む。

奥へ進むたびに自身の神力が高まっているのを感じる。

トヨの神力に反応して、松明の火力が乱れる。

トヨ「すごい神気……」

○アマノイワト・空洞

トヨ、開けた空洞に出る。空洞の上は穴が開いており、月夜が差し込む先には一面に花が咲いている。

物音が聞こえる。咄嗟に隠れるトヨ、

物音のする方を覗く。そこにはヒミコの姿が。

ヒミコ、花をちぎってすり鉢にかける。すったものを包みに入れ、火打石で火をつける。青く燃える包みを呑み込むヒミコ。

トヨ、岩陰から出て、

トヨ「何をされているんですか、ヒミコ様……!？」

ぎよっとするヒミコ。

ヒミコ「トヨ、なぜ君がここに……」

トヨ「それは私の台詞です。なぜヒミコ様も、あとさっきの一体……？」

目を逸らして何かを躊躇するヒミコ。

やがてトヨに向き直して、

ヒミコ「……この花はね、イザナミの霊薬」

トヨ「イザナミの霊薬……それってシジマ様が探されていた——」

ヒミコ「そう、厳密に言えばイザナミの霊薬の素材よ。シジマは生気がみなぎる薬と呼んでいたらしいけど、あながち間違いじゃないわ。この薬の効果は不老の力をもたらすこと」

トヨ「不老の力……でも、それはヒミコ様唯一の能力では……」

ヒミコ「それは嘘よ、私が民に広めたただの作り話。私には真正正銘なんの力もないわ。なんでそんなことをするのかって顔ね。それは私があなたの年頃のときまでさかのぼるわ。私の家は女の生まれが多くてね、代々、男の王に嫁いできた。巫女として鬼道に優れていたため、その力を子孫に受け継がせようとしていたのね。私もいずれは王に嫁ぐ巫女として育てられた。だけど、いつまでたっても私に鬼道の力は芽生えなかった。その代の王は私を拒んだ。当然と言えば当然ね。だけど、その時、王は当時のクナコクの兵に暗殺された。宮殿は混乱し、その騒ぎはすぐにクニじゅうに広まったわ。民が次々とクニを離れ、統率が機能しなくなった。そこで私を新しく女王として崇拝し、クニの象徴となる存在に仕立て上げた。その女王は鬼道にすぐれ、惑う民たちを安寧に導く現人神である、と。すると、すぐにクニじゅうの活気が蘇ったわ。私は何もしていなかったのに」

トヨ「では、どうして？」

ヒミコ「君も知っているはずよ。君たちが使う鬼道の力の源は祈り。こうあってほしいという願いが奇跡を起こす。このヤマタイコクが力を取り戻したのも、女王ヒミコという存在を崇拝したからそのもの。でも、それもそう長くは続かなかった。大雨や嵐、クナコクとの戦況の悪化が重なり、またも危機が訪れた。その時は、女王ヒミコの存在

だけでは立ちいかなかった。だが、私には鬼道の力はない。そこで私は探偵師としてあらゆる謎を解き明かすことで民を導き、信仰心を取り戻した」

トヨ「まさか、そんな……じゃあ不老の力を手にしたのは」

ヒミコ「そう、全ては民の信仰のため。このクニがいかに信仰によって成立しているかは、あの結界が物語っているわ。もし、私が失脚すれば、その時は鬼道の力が失われ、このクニはたやすく攻め込まれるだろう。だが……ぐふっ！」

ヒミコ、吐血する。

トヨ「大丈夫ですか、ヒミコ様！」

ヒミコ「ああ、だがこのままだ。不老の薬といえど流石に私のおいていく身体に追いつけないようだ」

トヨ「どうして、そこまで無理するんですか!？」

ヒミコ「言っただろう、民の信仰心のため」

トヨ「そんなことを聞いているんじゃないんです。だって、逃げ出すこともできたはずです。なのになんで!？」

ヒミコ「それは……別の世界を知ってしまったから」

トヨ「別の世界?」

ヒミコ「そう、あれは私が推理を失敗し、民の一人を犠牲にしてしまったときだ。私は家に伝わる家宝・八咫鏡を何の気もなく覗いていた、その時、鏡に映ったのは多彩な鬼道を操り人々を幸せにするもう一人の私の姿があったのだ。その後めくるめく景色が映り行き、やがて今では想像もつかないような景色のクニが生まれていた。そのとき、私

は思ったよ、ああ、私がこの世界の部屋違いなんだって。だから、私は私なりにあの世界のヒミコみたくあれのように振舞ってきた……そんな、取り留めのない話」

トヨ「……じゃあ私が見た世界は」

銃声がなるとともに、倒れるヒミコ。

トヨ、銃声のした方向を見る。

そこには銃を構えたスサノオの姿が。

スサノオ「ほお、これはすげえ代物だ」

ヒミコ「スサノオ!」

スサノオ「ヒミコ様! すごいでしょう、これ。鬼道の力のない俺でも指一本で人を殺せるらしいんだ」

トヨ「スサノオ様、何を……?」

スサノオ「見て分からないか、ヒミコ様を殺しにきたんだよ」

スサノオ、ヒミコに向けて発砲。

トヨ、地面から岩を突き出してガード。

スサノオ、腰のベルトから閃光弾を取り出して投げる。

目がくらむトヨ。

その隙にスサノオが青銅の剣を抜いて襲い掛かってくる。

避けられないトヨ。スサノオが剣を大きく振りかぶる。斬られる

寸前のトヨをかばうヒミコ。

ヒミコ、倒れる。

トヨ「ヒミコ様!」

スサノオ「俺にこの銃とやらをくれたやつがな教えてくれたんだ。この世界のあなたには民を救う力がないと。俺はどれがけ目が節穴なんだと呆れた。同時に怒りが込み上げてきた。民をだまして王の座に居座り続けていたことにな！ だから俺がヤマタイコクの王になる。さあ、その首差し出せ！」

ヒミコに剣を向ける。

スサノオ「トヨ、お前はここで殺すなど言われている。どけ」

トヨ「あ、ああああ！」

倒れていた松明の日が強く燃え盛る。

スサノオ「なに!？」

火はスサノオの全身を包み込む。

スサノオ「ぐああああ！ 貴様、それほどの力をどこに隠し持っていた！」

「

トヨ、喚き続ける。すると、地面が大きく揺れる。

目を覚ましたヒミコ、

ヒミコ「え、なに……!？」

トヨ「ヒミコ様……!! 傷は!？」

傍らで燃え続けるスサノオ。

地面が割れてきていることに気づいて

ヒミコ「とりあえずここから逃げましょう！」

トヨとヒミコ、外へ向かう。

背後で燃え続けるスサノオ、

スサノオ「がああ！ 死んで、死んでたまるかああ！」

地面が崩れ、そこへ落ちていく。

ヒミコ、背後を振り返るが、がれきが崩れ見えなくなっていく。

○アマノイワト・外（早朝）

外にでた二人。

トヨ「ヒミコ様、傷は大丈夫ですか？」

ヒミコ「ええ、霊薬の効果ね。傷はもうふさがってるみたい」

トヨ「良かった……」

ヒミコ「それよりスサノオは……」

トヨ「これじゃ生きている可能性は極めて低いかと……」

ヒミコ「スサノオは、私の秘密を知っている人物から指示を受けているようだった」

トヨ「私以外にヒミコ様のことを知っている人はいるのですか？」

ヒミコ「もういないはずだわ。ミナギだけが知っていたけど、彼女もいなくなってしまった。今はトヨ、君だけなの」

トヨ「それじゃ真犯人はヒミコ様の秘密を知り、それを変えようとしている人物ということですね」

ヒミコ「そう。あともう少し、もう少しで解決できそうなのに……!」

トヨ「ヒミコ様、真犯人はどうやってこの時代へやってきたのでしょうか？」

ヒミコ、何かをひらめく。

ヒミコ「……そう、そういうことだわ!」

トヨ「えっ、何がですか!？」

ヒミコ「真犯人が分かったかもしれない。いまずぐ宮殿に戻りましょう」

○宮殿・前（朝）

人々が戦の準備のためせわしくしている。

宮殿裏から木を伝って中に入る。

○同（朝）

ヒミコ、鹿の骨を火にかけている。横で見守るトヨ。

ヒミコ、目を閉じる。

ヒミコの脳裏にこれまでの事件の様子が浮かび上がる。

ヒミコM「シグリの結界、アマテラスの再臨、ヒルコの共鳴、未来からの使者……」

ヒミコ、目を見開く。

ヒミコ「真犯人とこの事件のからくりが分かった。今すぐ、皆を呼んで」

○宮殿

広間に集まったヒミコと部下たち、そしてクコチヒコ。

ヒミコ「シグリ、兵士たちの動きは止めてあるか」

シグリ「はい、攻撃の号令があるまで待機を命じております」

アラタ「どうしたんですか、ヒミコ様。もうじき戦が始まるというのに」

ヒルメ「……それに、スサノオ様の姿が見当たりませんが」

ヒミコ「スサノオはおそらく死んだ」

驚く一同。

ヒミコ「私用があつてアミノイワトに赴いていた。そこでスサノオに襲撃された。どうにか窮地を乗り越えたが、彼はアミノイワトの底に落ちた。そのとき、トヨも一緒にいた」

うなずくトヨ。

アラタ「ちょ、待ってください。スサノオがヒミコ様を襲った？」

ヒミコ「そうだ。だが、スサノオに指示を出した犯人がいる。そして、その人物はミナギを、ヒルコを、ヒミコを殺した張本人だ」

ヒルメ「なんですって！」

ヒミコ「私たちが生きるこの世界の遙か未来から、文明の初まりともいえるこの時代に跳んできた。その犯人は——あなただ」

ヒミコ、指さす。その先にいるのはクコチヒコ。

クコチヒコ「え？」

アラタ「てめえか、クコチヒコ！」

クコチヒコ「言いがかりはよせ！ 私が一連の殺人の犯人だと!? ふざけるのめたいがいにしろ！ 目を覚ましたら拘束され連れられてきたと思えば濡れ衣着せか。出鱈目言うな似非鬼道使い！」

ヒミコ「似非鬼道使いね、なかなかの得ているわ。だけど犯人はあなたであるに違いない。いいえ、貴方の陰に潜んでいる魂。そうでしょう？」

クコチヒコ、啞然とする。そして、気を失ったかのようにうなだれる。

アラタ「おい、クコチヒコ！」

クコチヒコ、豹変した様子で眼を覚ます。

クコチヒコ「……はっはっはっはっ！」

クコチヒコ「ご明察です、ヒミコ様。僕の名前はアンネ——なぜ僕の存在が分かった？」

一同、豹変したクコチヒコに驚く。

ヒミコ「それは犯人が何かを恐れて避けるように殺人をしてきたと感じたからよ」

シグリ「何か、とは？」

ヒミコ「それは、クコチヒコ——いえ、アンネ、この時代に生きているあなたの祖先」

トヨ「祖先？」

ヒミコ「そう。未来からやってきたあなたにも源流をたどればこの時代に行き着く。この時代にあなたと同じ血を持つ人物がいるかもしれないから、あなたはその人を殺すことは許されなかった。なぜなら、その人を殺してしまえば、この時代に来てアマテラスを呼び出そうとするあなたという存在がなくなってしまうから」

クコチヒコ「ははは！　そこまで読み切っているとは！　鬼道を使えなくともその器量は本物だね！」

トヨ「待つてください。あなた——アンネの祖先は誰なんですか!？」

ヒミコ「それは——ヒルメ、あなたよ」

ヒルメ「えっ！　私が!？」

ヒミコ「そう、信じられないかもしれないけどあなたはいずれ子を産み、その子どもはさらに子を産み、その連鎖の先にアンネがいる。それ

はアンネ、あなたも気づいているんでしょう。だって、あなたは鬼道使いで、その能力はヒルメと同じ共鳴。魂を入れ替える鬼道」

クコチヒコ「そうだ、僕は鬼道使いの家系の末裔なんだよ。僕の時代じゃ霊脈は薄れ、鬼道使いの肩書は名ばかりだったけどね」

トヨ「じゃあ、なんでここまでやってきて殺人なんかしたんですか？」

クコチヒコ「答えてあげてもいいけど時間切れだ」

クコチヒコ、懷からスイッチを取り出し、ボタンを押す。

すると、宮殿の一角が爆破。外から爆発音が聞こえ、宮殿が大きく揺れる。

ヒミコ「なに!？」

クコチヒコ「これで僕たちの世界は救われる。さあ、大儀式のはじまりだ！」

クコチヒコ、窓から飛び出して去る。

○宮殿・門の前

宮殿の一角が爆発する。

人々の注目が集まる。

村人「宮殿で爆発が起こったぞ！」

村人「何!？」

宮殿前に人が集まる。

そこに衛兵の恰好をしたクコチヒコが野次馬へ。

クコチヒコ「大変だ！　ヒミコ様が爆発に巻き込まれて亡くなられた！　皆も早く逃げろ！」

村人「なんだって！」

村人「ヒミコ様が……！」

村人「今から戦争がはじまるというのに、おしまいだ……」

○森・結界前

クナコク兵が隊列を組み、待機している。

木の上から望遠鏡のようなもので宮殿を見ていた兵士

兵士「どうやらヤマタイコクの女王が住む宮殿の一部が爆発したようです！」

隊長「なに!？」

兵士「宮殿を中心に混乱が広がっています。責めるなら今の内かと」

隊長「バカ言うな。この結界を前にして俺たちがやれることはなにも——」

兵士「隊長、結界が！」

兵士の手が結界を通り抜けている。

それを目にするクナコク軍隊長

○同

クコチヒコが携帯式閃光弾を打ち上げる。

閃光弾が空中で炸裂する。

○同・結界前

隊長、閃光弾の光を見る。

隊長「あれはクコチヒコからの合図——皆の者、出撃だ！」

クナコク兵たちが一斉にヤマタイコクへ駆ける。

○宮殿

爆破直後の宮殿。

一同はそれぞれ無事を確かめ合っている。

ヒミコ「アンネ、奴は何をしようと？」

シグリ、頭を抱える。

シグリ「ヒミコ様、緊急のお知らせが一つ。……結界が崩壊し、クナコク兵たちが一斉に攻めてきました」

一同「なに!？」

シグリ「全方位から一斉に侵攻しています」

アラタ「くそつ、なんだ！」

トヨ「……ヒミコ様への信仰心が失われたから」

ヒミコ「そうか、さっきの爆発で私が死んだと——シグリ、全軍の出撃命令を」

シグリ、魔術によって、

シグリ「全軍に告げる。ただちに出撃を開始城しろ！」

○ヤマタイコク各地

シグリの声が各部隊の隊長に伝わる。

それを聞いた隊長たち、

隊長たち「全軍、突撃開始！」

槍を持った兵士たちが迎え撃つ。

○宮殿

ヒミコ「シグリはそのまま兵士たちへの指示を。それ以外は避難しなさい」

アラタ「ヒミコ様はどうされるんですか!？」

ヒミコ「私はアンネを追う」

トヨ「私も行きます」

ヒミコ「君はここに残れ」

トヨ「私を信用してくれないんですか？」

ヒミコ「違う逆だ。君を信用しているからだ。君はシグリとここに残り、民たちを守ってくれ。君のその力で」

トヨ「……もう、諦めるしかないんですね」

ヒミコ「悔しいが、その通りだ。任せたよ」

ヒミコ、宮殿を去っていく。

それを見つめるトヨ。

○東内郭

兵士たちが争っている。

クナコク隊長「敵は一足出遅れている！ 速攻で畳みかけろ！」

ヤマタイコクの兵士に殺されていく兵士たち。

隊長「くっ……！」

そこに巫女たちが現れ、強化の祈りを捧げる。

身体が強化される兵士たち。

兵士たち、押し返す。

隊長「巫女どの感謝する！」

隊長M「だが、通常より効果が薄い。やはりこれもヒミコ様がいなかったら……」

その様子を高台から見るトヨ。

○北内郭

ヒミコ、村の中を駆ける。

ヒミコ、村人に話しかけられる。

ヒミコ「ねえ、あなたたち、もうじきこの場所も戦場になるわ、早く逃げなさい！」

村人「いいえ、もういいのです。ヒミコ様は死んでしまったのですから」

ヒミコ「はい？」

村人「さっき衛兵の方がヒミコ様が先の爆発で命を落としたと」

ヒミコ「その人はどこへ？」

村人「あちらのほうへ」

村人、指さす

ヒミコ「あそこはアマノイウト——ありがとう」

村人「あそこへ行つてはいけません、宮殿のかた。あそこは神聖なる山、

ヒミコ様しか入ることは許されません」

ヒミコ「私とそのヒミコよ。だからあなたたちも逃げなさい」

村人、ポカンとする。しかし、からかうように、

村人「まさか、こんな普通の人がヒミコ様なわけじゃないですか」

村人たち、笑う。

ヒミコ「たしかにそうね。この際、私の身分はどうだっていい。でも一人の人というわ。必ず生きて、生き残って……！」

ヒミコ、言い残して走り出す。

○東内郭

劣勢になるヤマタイコク軍。

トヨM「私の鬼道を使えば、皆を救える……でも、この力は……」

○アマノイワト

アマノイワトへの本道を駆けるヒミコ。

八咫鏡の前までくる。

そこにはアンネ（17）の姿が。

アンネ「思ったより早かったね」

ヒミコ「何をしようとしているの」

アンネ「それは先の推理の話を話してもらったら教えようか」

ヒミコ「いいわ。まず、あなたが結界を超えることができたカラクリ。それは魂替えの術。あなたはクコチヒコの身体に自身の魂を転移させることに成功した。そして、結界を超えるときはクコチヒコの魂に戻り、結界に検知されることなく通り抜けた。そして、殺人の度にあなたの魂に代わり、肉体の主導権を奪った」

アンネ「……」

ヒミコ「だが、動機が分からない。君のもくろむアマテラス召喚が何をもたらすのかもわからない」

アンネ「それはこの時代の人間には分からないだろうさ。そうだな、じゃあ教えてあげよう。アマテラスとはこの世界を見守る神だ。全ての現象は理屈で説明がつく。だが、同時に奇跡と呼べるものも存在する。それはあなたが使う鬼道もそうだが、もっと単純なもの。幸運というものだったりする。でもそれを侮ってはいけない。その軌跡一つで戦争が起こるかどうかが決まることさえある。アマテラスの存在はそれだけ大きいんだ。だが、僕の住む世界、この世界はアマテラスはそんざいしなかった。なぜか？ それはアマテラスの人柱となる女王ヒミコが普通の人間だったからさ。本来の世界では女王ヒミコは鬼道に長ける現人神であり、民からの畏敬や祈りを受ける器として完成していた。民の女王ヒミコは神であるという祈りが象徴化し、彼女王は神となる。それが安定した世界に必要な要素であった」

ヒミコ「つまり、私が器として足る存在ではないから、この世界は不安定になったということか？」

アンネ「そうだ。アマテラスのいない世界は戦争が繰り返され、あとに残ったのは破滅だけ。僕はこの部屋違った世界を正すためにここへ来た」

ヒミコ「私のせいで世界が……」

アンネ、銃を構える。

アンネ「それゆえ、あなたには死んでもらう」

ヒミコ「私の命を代償に何ができるの」

アンネ「あなたの魂は器ではないが、肉体は他のヒミコと変わりはない。この魂魄だけを破壊する弾丸で貴様の魂に空きを作る。そこにトヨの魂を組み込む」

ヒミコ「そんなことができるって言うの」

アンネ「僕の家系は魂替えの研究を重ねてきた。その成果さ」

ヒミコ「だとしてもあの子が易々と貴方の行くことに従うはずもない」

アンネ「そうかな、彼女も女王の素質をもつ身だ。何せ正真正銘の女王の後継だからね。民のため、世界のためなら分かってくれるはずさ——さあ、そろそろ仕舞いにしようか」

そこに死に体のスサノオが這いずり寄る。

スサノオ「貴様……もとより、俺を王にする機などなかったのか……」

アンネ「なんだ、生きていたのか。ああ、そうだ。実にあなたは使いやすいい駒だったよ」

スサノオ「そうか……なら、こころ起きなく殺せる」

スサノオ、ゾンビのように襲い掛かり、アンネに組み付く。

アンネ「何をする！ 離せ！」

スサノオ「俺が、王の座に……！」

アンネ「くそ、まだこんな力が……！」

取っ組み合いの最中、銃声が鳴る。

スサノオの胸から血が流れる。

スサノオ、力なく倒れる。

アンネ、立ち上がる。

アンネ「全く、最後の最後まで手間をかけさせやがって」

スサノオの死体を見る。スサノオから地面へ何かが流れている。

アンネ「これは、まずい！」

地面が大きく揺れる。

ヒミコ「何が起こったの!？」

アンネ「スサノオの魂魄が破壊される前にこの山の霊脈に流れた——つまり、この山にスサノオが憑依した……！」

またも地面が大きく揺れる。そして、山の内部に溜まったマグマが噴き出し山神の姿となる。山の頂上からマグマが麓へと流れだす。

ヒミコ「ここから離れましょう！」

アンネ、絶望した様子で、

アンネ「あ、あ……」

○東内郭

戦場で戦っているものたち、皆がアマノイワトの方に注目している。

兵士「なんだあれは……」

うねる八つの頭。そのうちの一体がトヨを見つけ、まっすぐに襲い掛かる。

トヨ、反応できない。

喰われかける直前でトヨのまえに結界が張られる。

シグリ「トヨ様！ ご無事で」

駆けつけるシグリ。

シグリ「あの怪物は伝承に伝わる山神」

ふもとに流れ出る溶岩が草木を燃やしている。

トヨ「まずい、あのままじゃ私たちのクニが……！」

そこにヒミコがやってくる。

トヨ「ヒミコ様！ アレは!?」

ヒミコ「あれは私たちが持つ神への恐れの化身よ。そうアンネが言っていた。当の本人はアマノイワトに残ったわ。そして、あれはおそらくトヨを狙っている。神としての器を持つあなたを取り込んで完全体になろうとしている」

トヨ「私を……」

その時、トヨに頭痛が走る。

脳裏に未来の光景が浮かぶも、ノイズが入りやがて真っ暗になる。

トヨ「未来が、見えない」

二人「なに!?／なんですって!？」

トヨ「おそらくこのままじゃ、未来が訪れるより先にこの世界が滅びる」

ヒミコ「そんな……」

トヨ「……私が生贄になります」

ヒミコ「……」

トヨ「もしあの化身が神になるというのなら、この世界も救われるかもしれない。これは私にしかできないことです」

トヨ、足元に空気の道をつくり、歩いて行く。

○空中

トヨ、山神と対峙する。

トヨ「山神の化身よ！ お前が求めているのは私でしょう！ なら私はその身を捧げます！」

山神がトヨをにらみつける。

トヨ、下で巫女見習いたちが逃げ惑っているの中にイヨを見つける。

イヨ、トヨに気づく。

イヨ「トヨ！」

トヨ「イヨ……なんでここに……！ ここは危険なの、逃げて！」

イヨ「トヨはどうなるの！」

トヨ「私のことは気にしないで。あなたも巻き込まれるわよ！」

直後、山神の一体がトヨを丸呑みする。

イヨ「トヨ！」

トヨ、暗闇の底へ落ちていく。

光が閉ざされようとしたその時、ヒミコの腕が穴をこじ開けるように入る。

ヒミコ「トヨ！」

トヨ「ヒミコ様!? なんで!？」

ヒミコ、空中にできた地面の上にふらつきながら立っている。

ヒミコの腕に薄い膜状の結界が張られている。

ヒミコ「私はあなたを死なせない。自分が犠牲になったから王の務めを果たしたつもり？ 笑わせないで。あなたがここで死んだら、生き残った民はどうするのよ！」

トヨ「それは誰かが——」

ヒミコ「ええ、いずれは誰かが王の代わりになるでしょう。ただね、王はクニの行く末を見届けなきゃいけないの。民を置いて行つてはいけないの。それが王の責務。それにあなたに生きてほしいと願う者がいる」

ヒミコ、力を入れて穴をこじ開ける。

そこにイヨの声が聞こえてくる。

イヨの声「トヨ！ 死なないで！ お願だから戻ってきて！」

トヨ「……ヒミコ様にはかないません」

ヒミコ「伊達に六十年も女王やってないわ」

とたん、山神の首が大きく揺れ、ヒミコが口の中に吞まれてしまふ。

少しの静寂。突如、山神の頭が内側からの風圧で破壊される。解放されるヒミコとトヨ。

トヨがヒミコを抱えたまま、ゆっくりと降りる。

イヨ「トヨ！」

イヨ、トヨに抱き着く。

照れくさそうにするトヨ、ふとヒミコの腕が焼けただれていることに気づく。

トヨ「ヒミコ様、それ……」

ヒミコ「いいの、気にしないで。じきに治るわ」

イヨ「トヨ、この方は……」

トヨ「我らが女王、ヒミコ様よ」

イヨ「この方がヒミコ様……すごい、初めて見ました！」

ヒミコ、予想外の答えに驚く。

ヒミコ「ありがとう。でも今はそれどころじゃないわ、何とかしてあれを止めないと」

イヨ「私、今の状況と似た話を知っています。山神が怒りし時、三種の神器を振るい大地を鎮めん」

ヒミコ「それって」

イヨ「ヒミコ様もご存知ですか」

ヒミコ「その伝承はだれから聞いたの？」

イヨ「私が修道院に預けられる前、お母さんから聞いたんです。でもあまりその時のことは覚えていません」

ヒミコ「そう……いいわ」

トヨ「三種の神器——一つはアマノイワトにある鏡、一つはヒミコ様が持っている剣、そしてもう一つは——盗賊に盗まれた勾玉」

ヒミコ「なら、直接本人に聞くしかないようね」

○拘置所

木製の牢屋に入れられた罪人たちが出ようと必死になっている。

罪人「くそっ、何がどうなってやがる！」

罪人「俺たちをここから出せっ！」

そこにヒミコたちがやってくる。

トヨ「いました。あの人です」

指さす方に勾玉を盗んだ罪人がいる。

罪人「おい、ここから出せ！」

罪人の文句を無視して罪人の近くに寄る。

トヨ「勾玉のありか、教えてください」

罪人「代わりに解放してくれたら教えてやるよ」

トヨ、ため息のあと冷酷な雰囲気を漂わせて、

トヨ「次期女王として命じる。早く教えなさい。さもないとあの怪物に焼き殺されるわよ」

罪人「（ふてくされたようすで）ちっ、分かったよ。俺が勾玉を隠したのは飯の中だ」

トヨ「えっ？」

罪人「俺は勾玉盗んで、とっとと逃げてやろうと思ったんだが、丁度他のやつがきて咄嗟に調理場の飯の中に隠したんだ。あとから回収しようと思ったが、お前のとこの幹部に掴まってこのざまだ、これでいいか」

トヨ「……まさか！」

ヒミコ「どうしたの？」

トヨ「いや、出ましよう」

外に出る。

トヨ「その勾玉、おそらく私の体内にあります」

二人「ええっ!？」

トヨ「私が宮殿に来たあの日の夜ご飯、思い出してみると固い石のようなものがあつた気がします」

気まずい雰囲気。

トヨ「何はともあれ、これで装備は整いました」

○東内郭

流れ来る溶岩に逃げ惑う兵士たち。

トヨの声「皆の者、聞こえるか。今、アマノイワトより現れた山神がこのクニの危機を脅かしている。そこでヤマタイコクの民、そしてクナコクの民たち、どうか私たちに協力してほしい」

兵士「ヒミコ様がいらないんだ、どうしようもないじゃないか」

兵士「こいつは一体誰なんだ？」

トヨの声「私はヤマタイコクの次期女王トヨである！ ヒミコ様直々にその命を賜った。ヤマタイコクの長は命を落とすし、ヒミコ様はその力を失った。だが、私たちを信じてほしい。なによりあなたたち自身を信じてほしい。私たちはまだやれる、抗える、と。この危機を乗り越えた先に平穏が約束されているわけではない、さらなる苦難が襲い掛かるかもしれない。でも、私は信じている。この世界とそこに生きる人々を」

兵士「そうだよな、ここでやらなきゃ全部終わりだ」

兵士「俺たちはまだ負けちゃいない」

次々と兵士たちが威勢を張る。

トヨ、感極まって涙がにじむ。

トヨの声「――では作戦を伝えます」

○高台

山神が麓におりようとしている。

ヒミコ、弓矢を放ち、山神の注意を引く。

トヨが草薙の御剣に手をかざす。

トヨ「我、八尺瓊勾玉を持つもの。八振りの刃で八岐の首を落とさん」

草薙の御剣が分裂し、八振りになる。

トヨ「発射！」

うち七振りが飛翔し、山神の首に追尾する。

嫌がる山神、剣はそれぞれの首に一振りずつ突きささる。

ヒミコ「鬼道にこんな力があつたなんて」

トヨ「あと一振り、本当にお願いしてもいいんですか？」

ヒミコ「ええ、この剣の持ち主なんだから当然の務めよ。トヨは術に集中して」

トヨ「はい！」

ヒミコ、しゃがむ。すると、地面から巨大な根っこが生え、ヒミコ

を乗せて山神のほうへ向かっていく。

ヒミコ、剣を構え目標の首を狙う。

ヒミコを追う山神の首たち。

首の一つが根っこにかみついてヒミコが振り落とされる。

根っこの先端持つてぶら下がるヒミコ。

途端、嫌そうに暴れまわる山神。

山神の足元には大量の水が流れ、山神の身体を冷却している。

水流の先にはヤマタイコクとクナコクの兵士、巫女たち。

その隙に体制を取り戻したヒミコ、狙った首に剣を突き立てるヒ

ミコ。

ヒミコ「今よ！」

トヨ「はい！」

トヨ、片腕を空に掲げる。

トヨ「刃は今、標となる。行けー！」

トヨ、腕を前に突き出す。

山神の首に刺さった剣が巨大な光柱となって八つの首を破壊する

。

トヨ「やった！」

喜びもつかの部屋、破壊された首がだんだんと再生する。

トヨ「うそ、それでも倒せないの……!!」

○アマノイワト

アンネ、膝をついて愕然としている。

アンネ「なんでこうなるんだ……これじゃ僕がいた未来もあいづらもない
なくなって……」

そこにトヨの声が聞こえてくる。

トヨ「皆の者、聞こえるか。今、アマノイワトより現れた山神がこのクニ
の危機を脅かしている……」

アンネ「なんで立ち上がれるんだよ……」

トヨの声「では作戦を伝えます。私たちの物語は終わっちゃいません。

ここから始まるんですから！」

アンネ、顔を上げる。

ヒミコが山神の首に剣を刺そうとしている光景を見る。

光柱が立つ光景を見る。

山神の首が再生していく。

アンネ「やはり、だめか……」

アンネ、踵を返そうとしたとき、山神の首に巨大な根っこが絡みついて再生を阻止しようとしている光景を見る。

トヨ、力を振り絞って念を送っている。

アンネ「——もしかしたら……」

アンネ、鏡の前に立つ。

アンネ「神はその世界に住まう人々の写し鏡。なら——」

アンネ、鏡に銃口を向ける。

鏡に別世界の幸せそうな未来の光景が映る。

アンネ、鏡に向かって銃口を引く。

○高台

トヨ、そろそろ神力が尽きようとしている。

トヨ「ぐっ……！」

何とか踏ん張って耐える。

そのとき、山神の動きが止まり、石化していく。

不思議そうに見つめるトヨ。

○アマノイワト

アンネ、石化した山神を茫然と見つめている。

そこにトヨがやってくる。

トヨ「ヒミコ様ー！ あ」

トヨ、アンネに近づく。そしてビンタをかます。

アンネ「え」

トヨ「私はあなたが来たという未来を見ました。でも同情はしません。罪なき人の命を奪っていい理由もありません。確かにこの世界はあるべき道を踏み外したのかもしれませんが、ですが、私は、私たちはこの世界を否定したくないんです」

アンネ「知ったことか」

トヨ「でも、あなたはこの世界を守ってくれた。あなた自身の手で。だから、私は信じたい。未来に生きるあなたたちにもこの世界が正しかったんだと証明してほしい。それが私の祈りです」

アンネ「……」

トヨ「これを」

トヨ、勾玉の首飾りを手渡す。

トヨ「未来の世界で役に立つかは分かりませんが、お守りに」

アンネ、受け取る。

トヨ「それじゃあこれで」

○アマノイワト・山道

トヨが宮殿に帰る途中。

ヒミコが壁に寄りかかっている。

トヨ「ヒミコ様！」

トヨ、駆け寄る。

ヒミコ「女王の風格が板についてきたんじゃない？ うっ！」

ヒミコ、腕を抱えてしゃがみ込む。

トヨ「ヒミコ様、その傷——」

ヒミコの腕の火傷は依然治っていない。

ヒミコ「どうやら霊薬が効かなくなっちゃったみたい」

トヨ「そんな……！ 誰か、治療できる人を——」

ヒミコ、トヨの襟を掴む。

ヒミコ「待ちなさい。最後に言っておきたいことがある」

トヨ「（涙ぐみながら）……はい」

ヒミコ「この四日間、楽しかったわ。あなたを選んで本当に良かったって思ってるわ」

トヨ「私ももっとヒミコ様といたかった……」

ヒミコ「私もよ。さあ、行きなさい。民が待ってるわ」

トヨ「（涙をぬぐって）はい！」

○宮殿・前

トヨと巫女たちが祈りを捧げている。

トヨを中心に円陣で囲んでいる。

トヨを中心に放心円状にそよ風が吹く、荒れた地がだんだんと緑に染まっていく。やがてヤマタイコク一帯を覆う。

術が切れる

トヨ、真剣な眼差しで、

トヨ「これでここ一帯の神力は尽きました。ですが、案じることはありません。女王の名に懸けてこのクニを再び蘇らせてみせると約束します」

× × ×

クコチヒコと握手を交わすトヨ。

× × ×

祝祭で宴会を楽しむトヨと村人たち。

○トヨの夢

夢の中で目が覚める。アンネの視点。

仲間「お、起きたぜ」

仲間たちが寄ってくる。

仲間「この様子じゃ……」

アンネ「ごめん、僕の力では変えられなかった」

仲間「そうか……」

各自、小銃を頭にあてる。

仲間「それじゃあ、三、二、一——」

全員、引き金を引く。しかし、弾が発射されない。

一人が思わず吹き出す。

それにつられて、全員が笑う。

そんな中、アンネ、ふと手の中にある物に気づく。

手を開くとそこには勾玉がある。

アンネ、勾玉をギュッと握りしめ、立ち上がる。

アンネ「あのさ、僕たちが力を合わせれば何かできると思うんだ。人里離れた山奥でもいい、僕たちにはまだやれることがあるはずなんだ」

仲間「アンネの言う通りかもな。俺たちはまだ死ぬ運命じゃないってこ
った」

仲間たち、うなづく。

アンネ「みんな……！」

アンネ、仲間のもとへと一步を踏み出す。

○宮殿・女王の部屋（朝）

トヨ、目が覚める。

×

×

×

装束に着替えている。

イヨ「トヨ、農業区の方から依頼が」

トヨ「分かった、すぐ行くわ」

○宮殿・正殿・中

村人が座っている。そこにトヨとイヨがやってくる。

トヨ「さあ、どんな事件でもお任せください。私トヨと」

イヨ「イヨが」

二人「解決して見せましょう」

了